【第75号】 2017.4.1発行

DRAMA かながわ 75

神奈川県演劇連盟事務局 ： 神奈川県横須賀市米が浜通1-3 Tel.045-263-4472

僕らは芝居を通して成長をしていく

文：studio salt 山ノ井 史

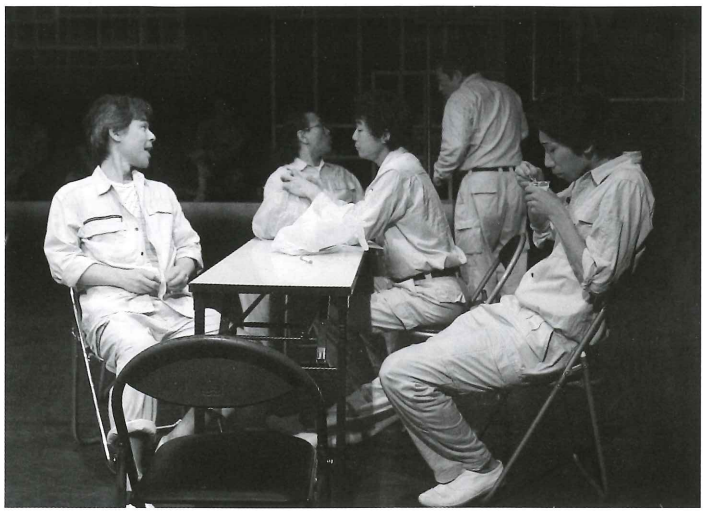
「7」2016Ver -僕らの7日間は、毎日やってくる- 作・演出：椎名泉水

2016年8月17日(水)～21日(日) 神奈川県立青少年センター 多目的ホール

響いてくる音。床を叩き、皿を叩き、椅子を鳴らし、それに合わせて聞こえてくる足音。多目的プラザからこの夏聞こえていた音はそんな多くの音だった。毎年の恒例事業となった「青少年のための芝居塾公演」は例年のホールでの公演ではなく、多目的プラザでの公演となった。私達、studio salt が担当することになったからだ。「今年はホールではなく、多目的プラザでやりたい。ミュージカルを好きな人もいるが、ストレートプレイが好きな人、ストレートプレイなら参加したい人も絶対にいるはずだ」そう息巻き、私達の芝居塾はスタートした。１０人以下での公演を行うのが常である私達は人数の多さに、予想はしていたもののやはり戸惑いを隠せなかった。お芝居が初めての人もいる。経験者もいる。そんな中で自分達が出来ることはなんだろう、教えられること等あるのだろうか。一体何を教えたらいいのだろうか。

そういった迷いがありながらも、しかしそのお陰で自分達が何を中心に考え、どのように作品を創っているのかを明確に言語化するきっかけにもできたことは大きな収穫と言える。芝居塾だからと言ってクオリティは絶対に下げたくない、そう考えていた私達は、お芝居が初めての人からしたら色々なことを求めすぎたのかもしれない。それでも５月のワークショップから始まり８月２１日の本番まで、塾生のみんなはとにかくよく一緒に作品を創ってくれた。場面転換等で音を多用した今回の「７−２０１６ver.−」は練習すべきことが多くあり、音の練習はズレが生じないように本番中も毎回行うくらいまで練習し、それと同時並行で稽古中はそれぞれの役やその場の空気を創る作業を行う。

時間がない中で、それぞれが稽古できる場所を見つけて自主的にシーンの練習をし、時間のある人はそれを見てあげ、役者同士が試行錯誤していく。演出のいない時間すらもとにかく作品を良いものにしようという空気が塾生の中に流れていて、そんな空気を共有できたことがとても心地よく、とても幸せな時間だった。芝居塾は、舞台の表から裏までを一緒に創っていく企画。そのため衣装や宣伝、小道具など塾生や私達はとにかく話しあった。芝居塾の開塾当初にみんなで持った共通認識は「この座組みを一つの劇団だと思って動こう」。そしてみんなで話し合うだけの土壌をワークショップの段階で創り、もちろんお芝居が初めての人は出来ないこと、知らないことも多く何をしたらいいのかすらわからない、そんな状況であった。それでも何かできることがないかを探していく姿勢を常に見せてくれたことがとても良い方向に向かう推進力となってくれていたように思う。結果としてできた作品は、手前味噌な話かもしれないが、予想以上の成果にでき



たように思えてならない。演劇はお客様にお金を支払っていただき、その対価として作品をお見せするものであり、公演中でも評判が悪ければお客様は増えないし、評判が良ければお客様の伸びは大きくなる。結局、追加公演を出すほど多くのお客様にご来場いただけたことが塾生にとっても私達にとっても何よりの賛辞となったように思う。もちろんそこに至るまでには多くの方のご協力があってのことであることを忘れてはいけない。ご来場いただいたお客様、主催として様々なことを教え、ご協力下さった青少年センターの職員や舞台部の方々、神奈川県演劇連盟の多くの方々、本当に多くの人に支えられてこの公演は成り立っていた。「青少年のための芝居塾公演」は私達のような大人が、まだ未知数の多くの若者達と公演を打てる、という非常に稀有な企画であると同時に、そこにあるのは青少年達へ教えや学びを与える場だけではなく、私達、担当劇団の人間も多くのことを学び、忘れていた多くのことを思い出させてくれる時間でもあった。ここで得たことを、参加者が（私達も含めて）次への糧とすることができれば本当に嬉しく思うと同時に、演劇を活性化させていく意味でも続けていかなくてはいけない企画であると思う。

芝居塾「７」

文：虹の素　熊手 竜久馬

ちょうど公演を見に行く２日ほど前、ネットニュースで「神奈川県で犬の殺処分３年連続０達成」という記事を見た。次々と流れては消えていく情報の中で、２日後に同テーマの作品を観劇に行く予定がなかったら、目にも留まらなかっただろう。記事では３年連続殺処分０ということ、それがどれだけすごいことかを伝えていたが、私は１年目も２年目も、そんなことがあったことすら気にも留めずに生きてきた。

さて、１０年目を迎える青少年のための芝居塾。５年ぶりに多目的プラザに戻っての公演でした。今回の上演作品「７」の初演は９年前の２００７年。ちょうど芝居塾１年目の年というと伝わりやすいでしょうか。

現在でこそ殺処分０を誇っていますが、初演当時はもちろん、作中のような処分が行われていたわけで、（２０１０年で犬猫合計約７００頭、２０００年まで遡ると２０００頭以上も年間殺処分されていたようです）初演時の衝撃と問題提起は相当なものだったのだろうと想像します。もちろん現在でも神奈川県以外では殺処分は行われていますので、まだまだ、この作品が訴えるべきメッセージは健在でありますが。

私が今回の芝居塾の「７」を観て感じたことが２つ。一つは、舞台全体がひとつの檻に見えたこと。物語は主に犬たちが収容されている檻の中ではなく、その外にいる人間たちによって進んでいくのだが、そこにいる従業員たちも皆、檻の中にいるような気がしたのです。檻の中にいる犬たちは、引き取り手が見つからなければ、７日目に処分される。つれてこられたばかり（１日目）の何もわからない犬をよそに、その日が近づく犬は悲痛な叫び声をあげる。この悲痛さが痛いほど伝わってきたので塾生は見事でした。

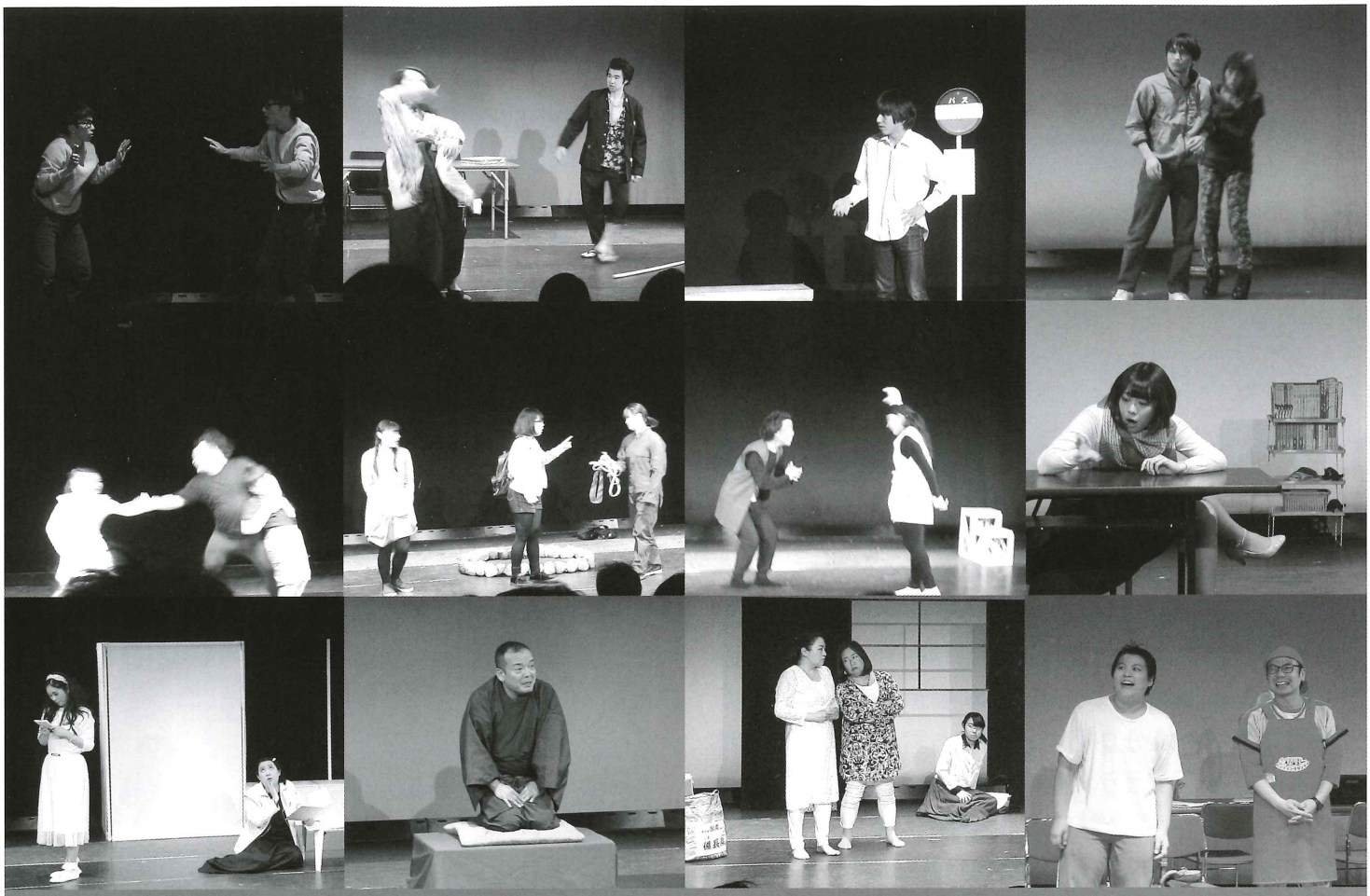
その外で、従業員たちはいつもの如く作業を進める。いつも通りの仕事、いつも通りの関係性、いつもどおりの日常。その「いつも通り」という檻の中に私たちは囚われている。そこから自力で抜け出すことは容易いことではない。誰だってはじめはその檻から抜け出すことを望んでいたはずだ。けれど次第にその檻の中で過ごすことに順応していく。檻の中にいる間だけは一先ず安心と言い聞かせる人もいる。犬たちと違い、いつ来るかわからない期限の時を待ちながら、私たちは生かされている。そんなことを感じた。

もう一つは、日を追うごとに右から左へ流されていく犬たちが、冒頭に挙げたネットのニュースのように見えた。次から次へとやってきて、ひとしきり騒いで、すぐ消える。消えていったものたちのことを私たちは覚えてはいない。次から次へと流れてくる情報を、大した興味を持たず、無関心を装って送っていく。だってそうしないと心が痛んでしまうから。他者に同情し続けていたら心が痛んでしまう。だからニュースから流れてくる悲痛な叫びも、犬たちの悲痛な叫びも聞き流す。同じじゃないか、と思った。

芝居塾は今年で１０年を迎え、次の１０年へとむかっていきます。思えば私が参加した１年目の芝居塾も、担当劇団の過去作品を劇団員メインで塾生とで再演するものでした。そういった意味でも１０年経って企画としての成熟を深めながら、最初の形に戻ってきた今回の芝居塾だったのではないかと思います。

塾生の声

- 部活でやる高校演劇とは迫力の違う劇をやれて色んな経験をさせていただいてとても良かったです。ワークショップも自分の基礎を鍛えることができたので大変良かったです。
- 大切な作品に出会えて、向き合えて、大切な仲間もできて最高でした。
- 非常にいい経験になりました。指導、環境、脚本ともに素晴らしく心地よく演劇を楽しむことができました。これも、神奈川県立青少年センター様のおかげであると実感すると共に感謝申し上げます。
- 人生の中でも経験できないことを経験させて頂き、学ぶことも沢山あり幸せな時間でした。学校や部活では学べない社会のマナー、演劇の常識や舞台の作り方を、塾生として学べたのはとても良かったです。



第14回 神奈川演劇博覧会

2017年3月18日(土)～20日(月)
神奈川県立青少年センター　多目的プラザ

文：実行委員長 関口素実

１４回目の演博が終了しました。今回も様々な劇団が、それぞれのやり方でパフォーマンスを披露しました。無事に終了したことに、県演連、参加劇団、そして来場された皆様に感謝申し上げます。ではここで改めて参加劇団とそのパフォーマンスを紹介します。

z-Φne

トップバッターは、大学の先輩後輩で立ち上げたユニット。ここで書くには「おやおや」と思うネタで、オムニバス公演のうちの１本といった風格。役者さんも楽しんでいることが伝わって、個人的にはそのような「演博っぽさ」を最も感じた公演。こういったノリで参加してくる団体は大歓迎ですね。

劇団「無題」

「無題」さんと初めて会ったのは１０年前。当時と比べて、芝居が随分と明るくなったなあ、というか、当時暗かったなあ。というのも「無題」さん、世代交代して、当時のメンバー入れ替わり、当然芝居も変わる。そして、芝居が変われば、人も変わる、劇団も変わる。ああ、「劇団は○○の縮図！」と言いたい！

BACK SPACE

こちらも大学演劇出身で、「z-Φne」さんの後輩にあたる方。チラシではキャストが２名以上でしたが、実際に行われたのは一人芝居。何があったのでしょうか？それはともかく、その１人が２人を演じており、かなり実験的な公演。そう、演博は「試す場」でもあるようです。安藤さんは昨年に引き続いての出演です。

竹村プロデュース

小田原を拠点に活動するチリアクターズ、の竹村氏によるユニット。チリだけあって、役者さんは力もあって安心。水族館のクラゲの水槽を前にドラマが展開。竹Ｐとしては、今回は２回目の公演で、すでにvol.３を計画中であるとか？チリと同様に、観ている我々を骨抜きにしていって欲しいものです……クラゲだけにねっ！

MMT パントマイム

昨年は郷まいむシアターさんとご一緒でしたが、今回は単独出演。代表の、やまさわさんは、マルセルマルソーに師事されたお方で、前回はそんなことも知らず

に失礼しました。ストーリーがあるものを、台詞を一切使わず、マイムと最低限の道具で表現するのは、お見事。尚、郷さんと同じく、拠点は鎌倉のようです。

▌劇団 CLOVER

中学校演劇のＯＧが集まっての、同窓会的公演。メンバーはまだまだ高校生。芝居はもちろん、実行委員会でも終始初々しい佇まいでしたね。正直なところ、こちらは親心で観ておりまして、無事終演した時のあの震えるような思いは、他に例えようがありません。このように演博は、学生演劇の受け皿としても機能していきたいです。

▌シアター・レインコート

劇団河童座のワークショップ参加者の、その成果を試す公演。河童座全面バックアップ！といっても横田さんと髙島さんだけじゃねーか！あ、でもそれでほぼ河童座か。本番前に３人で基礎練をまじめにこなす姿を見て、もう自分は若くないと思う私。ＷＳだけでなく、今後も芝居に関わり続けて下さいね。

▌空飛ぶペンギンカンパニー

演博ではお馴染み（？）の空ペンさん。副社長の菅原さんとは、会うたびに「この人とはもう〇年のお付き合いに…」という話になります。１月に本公演が終わったばかりでの緊急参戦で、短期間での稽古を感じさせず、テンポよく安定したパフォーマンスを披露。みんな大人になってゆくんだね。

▌劇団 Q+

昨年に引き続きの参加。「単なる趣味に止まらない“魅せる”舞台表現」の答えがきっとここにある！！と思って観ていたら、とある縁で以前居酒屋（野毛）にてご一緒した、滝田氏が出演しているではありませんか！演劇界の狭いこと狭いこと。悪いことはできないものですね。８月に公演を控えている模様。

▌プラスティックな月

県央地区・大和からの貴重なエントリー。「z−Φne」さんとは別の意味で演博らしさを感じた公演。「ロック・オペラ」と大風呂敷を広げたコント仕立ての「芝浜」は、何とも痛快！おじさんが楽しそうにやってる様は、藤沢の劇団・特別天然危険物を思い出させる。こういった劇団の存在を知ることができるのが、演博の醍醐味！

▌劇団あげ玉

昨年までは「あげ玉プロデュース」名義でしたが、今回でシンプルに。私は代表の静希さんを本名で呼んでいるのですが、周りの方が皆々しっかりと「静希さん」と呼んでいることに、「継続は力なり」を実感。横浜夢座への出演もあったようで、お忙しい中での出演でした。おつかれさまでした。

▌劇団コピュラ

昨年は「あげ玉プロデュース」を演出した、こんのさんの劇団。２本立て。既成台本の１本目がオリジナルの２本目の伏線となっており、リンクが見事。演博開催日の中で大道具が最も多い日の、最も多い劇団でした。演劇界と同じく、舞台上袖も狭い。張りぼての自販機は、地味にスグレモノ。

といった具合に、劇評というよりは、個人的な思いを書いただけになってしまいました。

県演連の事業で言うと「芝居塾」は、担当劇団の新劇団員入座や動員力アップを促す活動と言えるでしょう。それに対し「演博」は、主催する県演連と参加劇団（県演連外団体）が一緒に１つのイベントを盛り上げることで、加盟劇団を増やしていくことにつながる、貴重な企画であると考えます。県演連員の皆様には、ご理解とご協力をお願いする次第でございます。

劇団紹介

神奈川県演劇連盟に新規に加盟した劇団を紹介致します。

ガムシャニズム

神奈川県演劇連盟に新しい劇団が加盟しました。「ガムシャニズム」です。神奈川県演劇連盟を裏方として長い間にわたり支えてくれていた須藤旭が主宰する劇団です。今年度の合同公演を担当することも決定しました。これからの活動を応援していきます。

主宰の須藤旭と俳優の小山貴司が２０１５年３月に立ち上げた演劇ユニットです。基本的には須藤がやりたい作品を一緒にやりたい人間とやるという目的で立ち上げました。観に来てくれるお客様が笑顔になれる作品をモットーにしています。

前回の本公演を終えて

ガムシャニズム vol.3「英雄学園〜bonds and betrayal〜」は、初の本公演と言う事で、やりたい事を詰めに詰めました。

残念ながら動員数は目標を達成する事は出来ませんでしたが、評判が良く反響も割とありその点では僕自身ビックリしたと同時に達成感を得る事が出来ました。ただその詰めに詰めた事もあり本番の公演時間は２時間１５分と大分膨らんでしまいました。ですが見に来て下さったお客様からは、そんなに長いと感じなかったと言うお言葉を多く頂き胸をなでおろしました。

今までショートショートの短編ばかり書いていた為今回長編に挑むに当たり色々な壁にぶつかりました。今までとは違う多くの個性の強い登場人物、しっかりと意識しなければならない起承転結、そして書けば書くほど伸びていくページ数、脚本自体もあがるのは２週間前、そこからカットや修正をして、結局本番ギリギリまで変えてました。次回公演では今回の反省を活かして行きたいと思います。

今年度の合同公演に向けて

２０１８年２月の神奈川県演劇連盟の合同公演を担当させて頂く事になりました。団体としては４回目の公演で青少年センターのホールで本番やらせて頂ける事が非常にありがたく同時に戦々恐々としております。作品としては前回扱った英雄学園の次回作を行う予定です。前回よりもスケールを広げ、僕も力をつけて取り組みたいと思っています。

ガムシャニズム　須藤旭

僕らの演劇

よこはま壱座

「見果てぬ夢」 作: 堤泰之 ／ 演出: 濱田 重行

7月1日～3日　於：鶴見区民文化センター・サルビアホール

横浜の本多劇場が閉鎖してから、横浜の小劇場状況はあまり改善されていない。そんな時に、横浜市鶴見区民文化センター・サルビアホールでの、よこはま壱座　第１２回「見果てぬ夢」公演を観劇させて頂いた。よこはま壱座の公演は何度か観ていたが、このホールでの観劇は初めてである。キャパ６００名弱で、芝居小屋としては舞台上や照明の事はわからないが、客席からは見やすく音響的にもいい小屋ではないだろうか…。

舞台は病院の中庭。がんを告知された男とその妻。中庭に集まる入院患者と見舞う者。それらと医療スタッフとの人間模様である。演出と舞台家でもある濱田氏の実話がベースにもなっているようだが、がんという重いテーマに関わらず、舞台はポップに進行していく。また、よこはま壱座のお家芸でもある舞台装置のリアリズムと、舞台奥に病院廊下の導線を引き、役者の出ハケにタイムラグを持たせるあたり、横浜辺りの舞台演出家としては１ＵＰであろう。

緞帳が上がると同時にミスター・チルドレンの曲…劇中には今井美樹、スピッツ等の曲がストーリーに沿って流れてくる。この作品の時代設定は１９９０年代後半なのであろう。演劇にはＢＧＭとして、いろいろな楽曲が使用される。また。それが劇の臨場感や哀愁をデフォルメさせる。１９６０年代に新劇と言われた演劇は音響効果（ＳＥ）が多く、音楽は皆無であった。１９７０年代に入り、故つかこうへいや唐十郎等が頻繁に歌謡曲からロックまで積極的に使い、演劇には照明と同等に楽曲が必要な演出アイテムとなった。今公演のがん患者と病院がテーマであれば、一般的にはクラシックや４ビートの曲を使用するだろう。しかし、８ビートや１６ビートの曲を使ったことに演出の意図と、その時代を筆者は感じえなかった。「死ぬ前に何を食べたいか？」と言うが、作詞家の故阿久悠が、「死ぬ前にどんな曲を聴きたいか？」という本を読んだことを劇中に流れる曲を聴きながら思い出した。

最後に、横浜には近代演劇の後継者はいるが、現代演劇は少ない。また、ホール芝居での役者のセリフまわしと滑舌を考えてもらいたい。舞台のセンターを囲んだ井戸端会議風な芝居は勘弁してほしい。折角、役者は素敵な広い舞台に立っているのだから…。

Y.S.Barefoot Theatre　フランキン三浦

虹のたまご ＆ 虹の素

「雨上がりには好きだといって」 7月29日～31日　於:ラゾーナ川崎プラザソル

脚本:桜木想香・熊手竜久馬　演出:小山貴司・熊手竜久馬

川崎市民でありながらラゾーナ川崎プラザソルを訪れたのは２度目。しかも「虹の素」の観劇は初めてでした。その存在は勿論知っていましたが、「愛」を最上段に堂々とテーマに掲げるので、何となく腰が引けていたというのが正直な所です。入場してみると成る程、客層は２０代の男女が９割以上でしょうか。少々肩身が狭い。

さて今回は「虹のたまご」＆「虹の素」公演ということで、各々１５分＋６０分の連続上演でした。前者は高校生短編「からっぽのキラメキ」。男女２人ずつ４人の高校生の日常的な会話を舞台化したそうですが、タイトルも自虐的な通り内容は殆ど記憶に残りません。しかし若いエネルギーは確かに感じられ、楽しかったです。後者の「アインブラットの本」は再演とのこと。〈それは、君に伝えたいたった一つの言葉を探す旅〉のコピーが想像を膨らませます。

高校の図書室をメインとして、屋外、本屋と場面転換していく手際は、役者のスムーズな動き、照明の機敏さ、スライドに拠る４月から５月にかけての日めくりカレンダー表示の説得力も手伝って、スピーディーで心地よいリズム感に溢れていました。１週間をサイクルとして、AB,BC,CD～という図書委員の日直組み合わせによる会話の積み重ねで、恋愛模様を少しづつ立体化し、尚、卒業生でもある教育実習生による一冊の本探しと、かつての愛する人へ伝えたかった言葉探しが織りなす作劇術はかなりの力量を感じさせます。最近、ドラマでもコミックでも「選択と後悔」がよく取り上げられます。人生は常に選択の連続で、「たら、れば」は後悔と共に淡い記憶を辿る甘美な旅路と言えるのでは…。

優しく温かい、でも儚い、そんな気持を共有できるのがこの劇団の持ち味であり、それは劇場の空間によく現れていました。出演者一人一人が魅力的でしたが、客演の緑さん、軽妙な演技で笑いを独り占めしていたのはチョットずるい（笑）。最後に辛口のコメントも少々。最近たまに目にするのですが、ストップモーションとキャスト紹介のスライドは気障です。

また「学生の学生による学生のための作品」はいつまで続けられるのか、転換点はやってくるのか、個人的に興味が湧きます。

劇団かに座　小林一雄

編集後記

夏が近づくと芝居塾が始まるなと毎年感じています。この号が発行されている頃にはオーディションが終了して暑い八月を熱い舞台にしてくれる塾生が決まっているはずです。

平成２９年８月２６日（土曜日）から８月２７日（日曜日）に神奈川県立青少年センター ホールで行われる「青少年のための芝居塾」。今年もstudio saltが担当劇団として塾生と共に一つの舞台を創り上げていきます。期待しながら取材していきたいと思います。

演劇博覧会は毎年、実行委員や委員長として関わらせていただいています。毎年多くの劇団が参加し、交流する姿を間近で見ていると本当に嬉しく思います。芝居を無料で何本も観ることが出来るこの企画が今後も続いていくことを願っています。

今年度の神奈川演劇連盟合同公演の担当劇団はガムシャニズムです。まだまだ産声を挙げたばかりの劇団ですが、やる気と元気と本気の芝居で創り上げて欲しいです。エンターテイメント性の高い舞台を目指していると聞いていますのでその中で熟年の俳優陣が踊っている光景を切に見たいと願っています。２０１８年の２月に神奈川県立青少年センターのホールで行われます。

神奈川演劇フェスティバルについては別冊号で発行しますのでお待ち下さい。また、諸々の都合により今号の発行が遅れましたことをお詫び致します。

編集長　緑慎一郎

『演劇資料室』をご利用下さい

■神奈川県立青少年センター2階には「演劇資料室」がございます。■

外国や日本の戯曲をはじめ、演劇図書、演劇雑誌がそろえてあります。戯曲などは貸出もしております。利用は１回３冊まで、無料で２週間借りられます。また、神奈川県内のアマチュア劇団の活動記録や、演劇に関する技術ＰＲ誌などもあります。照明のこと、舞台装置のこと、音響効果のこと演出のことなどなどいろいろな演劇に関する技術の相談においで下さい。私たちの仲間（神奈川県演劇連盟）がきっとお手伝いできます。まずは電話でお尋ね下さい。ご相談に答えられるボランティアのスタッフを用意します。「演劇資料室」は火曜から日曜まで午前９時から午後５時まで開館しています。お休みは毎週月曜と年末年始（１２月２８日から１月４日）だけです。

神奈川県立青少年センター２階　演劇資料室
〒220-0044 横浜市西区紅葉ケ丘 9-1　Tel：045-263-4472

神奈川県演劇連盟加盟団体（５０音順）

●演劇プロデュース『螺旋階段』●ガムシャニズム●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座
●劇団川崎演劇塾●劇団こゆるぎ座●studio salt●劇団よこはま壱座●ナオサク企画●虹の素
●まりこ☆みゅーじあむ●ミュージカルプロジェクトM.PinK●ヨコスカ・ベアフットシアター●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟ＨＰ：http://kenenren.org/

ＤＲＡＭＡかながわ[第７５号]　発行日:２０１７年４月１日　発行:神奈川県演劇連盟
編集:緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）・浅水真子（劇団やぶさか）・海老名信吾（劇団よこはま壱座）・関口素実・山元洋一（外部協力）・岡本みゆき